

バッタはカマキリに

小学5年 芳賀 董

「やったー。バッタつかまえたよ。見てほら見てー。」

弟がうれしそうに言っています。そのバッタは家で大切に飼っています。ある日、

「カマキリ！カマキリだ。やったー。」

弟がうれしさをかくしきれないほど喜んでいました。そして、何かエサをあげなければいけません。そしてあのバッタをカマキリにあげるといったのです。そして弟はうれしそうにバッタをカマキリのところへと入れたのです。そして、今バッタは小さな食べかすになっています。そんな様子を見ても、弟は泣きません。

なんで大切にしていたバッタをカマキリにあげたのでしょうか。ふつうの場合、バッタが可哀想だと思つ氣がします。けれど、弟はカマキリにあげました。では、カマキリにあげなかったらどうなっていたのでしょうか。バッタはカマキリに食べられなくてすみません。けれども、カマキリはおなか为空いて、死んでしまうかもしれませぬ。ただ、カマキリはまたおなかですきます。そして、また他の物をあげなければいけません。命という大切だといわれている物をたくさん

あげるといふことです。けれどよく考えたら、私達だっていっぱいそれを食べていると思いました。それを食べないと生きていけません。人間とカマキリどちらもその命です。そして、バッタも、他の虫達、そして動物などもみんなそうです。上も下もない命です。それらがそれらを食べている。そういうことです。けれどもこれを言いかえてみると、みんなで命を支えあっている。一つの命がみんなの命になると。たとえ一つの命でも、むだにはいけないと思いました。

そして弟のバッタはいなくなりカマキリという一つの命になっていたのです。